

天声人語

1962年、千円札の肖像画が伊藤博文に決まるまでには、有力なライバルがいた。実業家の渋沢栄一である。ぎりぎりまで候補に残ったものの、落選した。容貌がお札向きでないことが理由の一つだったと、当時の新聞にある▼容貌とはつまり、渋沢の写真にヒゲがなかったことか。今ほど偽造防止技術が高くなかったその頃、ヒゲのあるなしは重要な要素だった。細かな毛の一つ一つが描かれれば、それだけ偽札づくりが難しくなる。お札の伊藤は白く豊かなヒゲが目立っていた▼政治家や文化人の多かった紙幣の肖像に、ビジネス界からの起用が決まった。20年ぶりの刷新で、1万円札には渋沢が選ばれた。聖徳太子、福沢諭吉に続いて3代目となる▼時代の潮流を見極めた人だった。明治初年、若くして政府から民間に転じた。「金銭に眼が眩み、商人になるとは実に呆れる」と友人から言われたが、日本を豊かにするためにには商売が大切だという信念を貫いた（『論語と算盤』）。なるほどお札にふさわしい人かもしれぬ▼潮流といえは、キャッシュレスの流れが進む現代である。新紙幣が世に出る2024年には現金の肩身はもっと狭くなっているかもしれない。「財布に栄一を……」との言い方が果たして定着するかどうか▼渋沢はお金について「よく集めよく散ぜよ」と書いた。お金は貴いが、むやみと惜しんでは社会が活発にならない。乱費ではなく、善用せよ。お札の人に納得してもらえらるような使い方ができれば。

2019・4・10

購読お申し込み・配達関連のお問い合わせ＝0120-33-0843(7～21時) 紙面へのご意見・ご質問＝0570-05-7616(平日9～18時、土曜9～17時、日・祝休み)

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。